

進学した卒業生の声



Matsuo Naho
松尾奈保さん

平成27年度卒 洋画専攻
(木津川市立山城中学校出身)
広島市立大学大学院
芸術学研究科造形芸術専攻 2年生

私は大学では油絵を専攻し、大学院生の今は大学の課題に取り組みながら、個人の作家活動もおこなっています。学部頃は油絵の古典技法やデッサンなどの基礎的な課題をこなしていましたが、大学院では自分で関心のあるテーマを設定し、それに基づいて制作や研究に没頭する毎日です。

私は、制作とは制作に関わるもの全てと自分との対話、コミュニケーションのようなものと思っています。例えば絵画だと、描くモチーフと自分の間で、どうしてそれを描きたいのか、どうすれば自分の言いたいことを表現できるかを考えながら制作を進めます。その作業では、目の前の景色に心を動かされて筆を走らせることもあれば、自分が意図した表現になるようにモチーフや絵の構成に工夫を施していくこともあるでしょう。時には材料や道具を自分の手足のように扱う技術が必要になるかもしれません。そうやってやり取りしたことが、自分にしかできない、作品の一番大切な核となるのではないのでしょうか。それは素直に誠実に自分と、または周りの世界と向き合わなければならないことです。こういった私の制作への姿勢は、自分の感性を温かく受け入れてくれる銅駝での毎日で身に着いたものです。先生方や仲間を支えられながら、のびのびと粘り強く取り組んだことすべてが今の活動のペースになっています。

中学生のみなさん、自分が何に興味を持っているのか、何を感じているのかを大切にしながら今できることをやり続けてください。そうして身に着けたことは、どんな世界でも自分を支えてくれる力になると思います。



Otsuka Yuzu
大塚ゆずさん

平成30年度卒 染織専攻
(京田辺市立大住中学校出身)
京都市立芸術大学
美術学部工芸科 2年生

私が銅駝を卒業してから2年が経とうとしています。京都市立芸術大学の工芸科に進学し、この春から2回生です。

京都芸大では入学後に専攻を決めるため、1回生では総合基礎実技という授業を受けたりそれぞれの専攻の体験をしたりします。総合基礎はユニークな課題が多く自由な発想やひらめきで制作することが多かったため、最初は自分の頭の固さに悩まされました。それでもスケッチをしたりマインドマップを作ったり、素材で遊びながら実験をしたり、とにかく手を動かすことで課題に就いていきました。これらは銅駝の表現基礎や実習で、ものづくりには観察やアイデアの整理、そして何より楽しんで作ることが大切であると学んだからです。制作メモなどから高校生の頃の自分の考えや言葉を見返すこともありました。辛いことや焦ることもたくさんありますが、無駄な経験なんてないと思いつつ踏ん張っています。

4月からは大学でも染織専攻に進もうと考えています。色の響き合いを生み出すことや、染料が持つ独特の透明感、布や糸の素材感が好きだからです。知識を深め技術を磨けるよう頑張ります。そして染織以外でも興味を持ったことにはぜひ挑戦し、楽しんで制作を続けていけたらと思います。

私にとって銅駝で過ごした日々はかけがえのないものです。不安な時、分からないことがある時は学校の仲間や先生方と話をしてみてください。きっとあなた達の力になってくれます。誰とも話したくない時はどこかに出かけてみましょう。学校の周りには自然も街もあります。感じたことを言葉や絵に残してみるのもオススメです。充実した高校生活を送れると思いますよ。



Kobayashi Chihiro
小林千紘さん

平成28年度卒 デザイン専攻
(京都市立修学院中学校出身)
武蔵野美術大学
基礎デザイン学科 4年生

銅駝に入学してよかった、と今でも心から思います。銅駝で制作した数々の作品たちは私の自信そのものです。

銅駝で学んだ、制作に対しての考え方やアイデアの出し方など様々なことが今、生かされています。身についたその力を大学の教授に褒められることもあり銅駝で3年間を過ごしたことが私の誇りです。デザイン専攻では様々な課題を効率よくこなしていくため、私は時間の使い方が上手くなったと思います。これは制作だけに限らず普段の生活でも役に立っています。

私は今、より多くの人にデザインで「伝える」ために就職活動を行っています。就活では作品をデザイナーさんに見てもらい機会が多々あります。銅駝での作品を「すごい」と言ってくれたこともありました。銅駝で楽しく過ごした時間は確実に私の力になっているのだと感じます。

先生との距離が近いことも魅力の一つです。いろんな先生にたくさんのお話を聞きましたし、たくさん答えていただきました。今でも相談しに行くこともありますが！銅駝の先生、友人は私のパワーの源です。行き詰まったときは友人たちとの写真や作品を見返してパワーをもらったりします。銅駝は、自分と美術とじっくり楽しく向き合うことができる特別な場所だと思います。

楽しい時間と努力は裏切りません。必ず力になるはずですよ。何ヶ月もかかる制作でも、毎日のお昼時間でも、一枚のデッサンでも、無我夢中で楽しく過ごしてほしいです。



Taniguchi Yuki
谷口雄基さん

平成30年度卒 洋画専攻
(京都市立双ヶ丘中学校出身)
京都造形芸術大学 2年生

銅駝では「美意識」を育んだと思います。美術見学旅行で観た地中美術館のモネ、文化祭の気力溢れる友達達の演技、美工作品展で観た憧れの先輩や仲間の作品……。美に触れる機会が多く集まる学校生活で、正しいか間違いかといった判断基準よりも、私自身にとってこれは「美しいか否か」という価値観が強く育まれていったように思います。

進学した京都造形芸術大学では、茶道や能楽、陶芸や日本画など、日本文化について幅広く学ぶコースに入学しました。また、京都の職人さんのところへ取材に伺い、現場の声をネットの記事にすることで伝統工芸の魅力を人に伝える活動もしています。銅駝では洋画を専攻していたので、全く違う、むしろ真逆の方角に舵を切ったように思われるのですが、美術に触れて楽しむという点では何の違もない地続きのことです。油画を高校時代に経験していたからこそ、日本文化が世界とどう違うのか理解しやすい部分も多くあります。これからは作家の卵として個展を繰り返し行いながら、大量生産に頼らない仕事の魅力を発信する活動にも尽力できたらと思います。

中学生の皆さんには、たくさん笑って、たくさん泣いて、たくさん思い出を作してほしいです。正解も間違いもない人生の中で、力になってくれるのは己の「美意識」であり、それを温めてくれる人たちに囲まれた今ある日々だと思います。時間は鴨川のように簡単に流れ去ってしまうので、今を精一杯大切に過ごしてください。多分、私以外の卒業生も各々の場所で似たような気持ちを抱いていると思いますので。

Graduates Voices 活躍する卒業生の声



Nojima Kazuki
野嶋一生さん

平成19年度卒 洋画専攻
(京都市立修学院中学校出身)
竹中木版竹堂 彫師

銅駝美工卒業後は京都市立芸術大学にて版画を学び、現在は木版画の彫師として仕事をしています。伝統的な木版印刷では、絵師、彫師、摺師の分業で制作を行いますが、その中で彫師は、絵師が描いた絵を転写し、山桜の板に彫刻して摺師に回す。という中継的な役割を担っています。この、他者が描いた絵、図案、文字などを版にする技術には、造形への感応と理解力が必要とされます。自分が銅駝で培うことができたのはこの力の素地でした。

幼少の頃から図画工作が好きだったのですが、中学3年で銅駝を志した段階でも、自分が作るもの、描くものにしか興味はなかったと思います。しかし銅駝では個性の強い友人と彼らが作る作品が身の回りに在るのが常です。「なるほどあの子ならこんな絵を描くだろう」「あいつがこんな作りよった」など、友人とその作品を同時に見て理解することで、造形物それ自身が好きになっていきました。この絵そのものが好きであるという素地がないと、他者の絵を自分なりに解釈、理解することは出来ないのです。

高校時代の自分は「こうりたい」「こんな表現がしたい」という強い思いは無く、まわりへのコンプレックスもありましたし、決して実技の成績も良くはありませんでした。大学時代も含めて悩む時間も長かったのですが、今の師に出会い、木版彫刻の仕事に就いたことで、他者の作品を理解する喜びを、形にする手段を手に入れました。

この仕事に華やかさはありません。絵を見、感じて考え理解して、黙々と彫刻刀を動かす時間が続きます。ですが、そこには他者と共に制作することで高まった自分の技術を入り口にして、造形の静かな喜びが広がっています。ホノルル美術館と共に取り組んだ歌川広重「亀戸梅屋敷」の復刻では、広重の運筆に対して、木版彫刻の技術と、これまでの造形経験を頼ってアプローチすることにより、広重の美意識を体感しました。時間さえ超えて他者の意思を自分に取り込むことができます。そして理解の経験を重ねるたびに絵を見、作る喜びも大きくなるのです。

銅駝での3年間でなければ他者の作品を理解する喜びに気付けなかったかもしれません。みなさんが高校生活で経験されるポジティブなこと、ネガティブなこと、全てを素直に受け止めて、それを考え、理解していただく。



Azechi Takumi
畦地拓海さん

平成20年度卒 漆芸専攻
(亀岡市立東輝中学校出身)
漆芸作家

私は、銅駝美術工芸高校を卒業後、富山大学芸術文化学部へ進学し、タイ留学、同大学大学院修了を経て、現在漆芸作家として活動しています。漆には、高校で初めて出逢いました。それまで存在も意識したことなかった素材、作品を見た時に、自分だったらどんな作品が作れるようになるんだろう！と気持ちが高揚したのを覚えています。

大学院を出て作家として活動し始めて3年ほど経ちますが、好きだけでは到底成り立たないくらいに大変です。全て自分で考え、行動に移して進んでいかなければなりません。作品が突然作れなくなる時もありましたし、やりたいのに上手く出来なくて苦戦し続ける毎日です。そんな日々でさえ愛おしく、何故かやめられないから、今こうして生きているのだと思います。

作品は、漆判と名付けた技法とマチエールを組み合わせた平面、乾漆ベースにタイの箔絵技法やマチエールを活かした抽象立体を主に制作しています。学ぶ程に深く、様々な技術や素材の扱いを知る事が出来、楽しみながら制作していますが、どんなに勉強して技術や知識を得ても、高校時代初めて漆に触れた時のワクワクや知らないからこそ溢れ出る無謀な制作意欲は、今でも忘れたくない姿勢です。

銅駝美術工芸高校は、他に例を見ないような素敵な学校だと今でも思います。それは専門性が高いとか京都の立地が良いとかそういう事でなく、体育祭、文化祭、展覧会や日々の勉強・制作において、同じ志を持った友と全力で取り組み競い合い、先生、同級生、家族、地域の方々や作品を観てくださる方々との交流を通して人間性を育む事の出来る環境だと感じます。社会に出て、結局自分が何者なのか、何になりたいのか、これからどうしていくのか。分からない事だらけで、それを選ぶのにも学校のように守られた環境とは違い、すでに自立した環境だと相談出来なくて動けなかったり、自暴自棄になったりするかもしれません。進学が就職、または私のように作家として一人でもやる場合でも、一人でも良いから同じ志を持った仲間に出逢う事は本当に大切です。しかしそれは、運だとか待っていればそのうちなんて想いでは叶わず、自分がその人達と出逢うに相応しい志を持っていないと叶わない環境だと考え、日々を積み重ねています。

私は、アーティストは自らの身を削り、すり減らしながらもやりたい事を追い求め、夢を形にしていって最後に格好良い職業だと思っています。中途半端であればエゴであるそれも、本気で向き合えば誰かの夢となり、希望になり得ると信じています。

これから皆さんも是非、何事にも「本気で」向き合ってください。進んでいってください。

